

ロールプレイ対話およびメールにおける断り表現

—大学生の理由の述べ方を中心に—

稲垣 桂

[キーワード：①断り ②ロールプレイ ③メール ④理由]

1. はじめに

「断る」という行為は、相手の意向に反して遂行しなければならない為、人間関係を損ねる危険性を持つ、難しい言語行動の一つである。このような言語行動を日本語母語話者は、どのように行っているのだろうか。また、そこにはどのような特徴があり、実際にどのような表現形式が使用されているのだろうか。

本研究は、日本語母語話者の、相手による断り方の方法やその違いについて、また、その断り方のヴァリエーションとその要因について調べた。本稿では、実際の断りの中に現れた言語的な成分や特徴だけでなく、断る側の心理的な側面についても調査対象とし、それらの関連性もふまえて総合的に見ていく。なお言語的な成分については、断り表現の中で特に重要な位置を占める、理由の述べ方について考察していきたい。

2. 先行研究

断る際、具体的にどのような言葉を使うかを調査した研究は生駒・志村（1993）の後、増えてきたと言える。この生駒・志村（1993）では、英語から日本語への「断り」に関する語用論的転移とその有害性について述べられている。調査方法は、アメリカ人の日本語と日本語母語話者の日本語による談話完成型テストであるが、被験者はハワイ大学の大学院生（各10名ずつ20名）で、年齢は不明だが、海外滞在歴の長い母語話者も多く、正確な比較ができていないと言える。

横山（1993）では、日本人の日本人に対する断りとアメリカ人に対する断りがロールプレイによって比較され、社会言語学的なフォリナートークの存在による断り方の違いについて述べられている。ロールプレイによる調査結果は、談話完成型テストより自然な状況に近いデータだと言えるが、あくまでも英語との比較であり、意味公式の分類にとどまり、日本人の断り方の分類はされていない。被験者の世代は30代から40代で、大半が会社員や教師のような職業で、若干が主婦である。データ収集は、2人の日本人

(男女) 及び 2 人のアメリカ人 (男女) により、合計 80 人の日本人の男女を対象に行われた。

目黒 (1994) では、日本人の日本語による断りのストラテジーとして、森山 (1990) の大学生を対象としたアンケートによる意識調査から指摘された①「嫌型」②「嘘型」③「延期型」④「ごまかし型」という分類に、さらに日本人が多用する間接的発話行為の一つとして⑤「謙遜型」の存在を主張している。これは、被験者は大学生か大学院生で、男女 57 名ずつ、合計 114 名を対象に調査している。これはどのような相手に対してどの型を使うかという分類や、断り方が明確に分類されている点で画期的であるが、自由記述式テストであって、実際の会話場面とはずれがあり、また日本語の言語的な側面、言い回しや細かい表現の差には触れていない。

言語的側面にも触れたものとしては藤森 (1995) がある。ここでは断りの中でよく見られる弁明の際の表現形式として①ノダ型、②カラ型、③ノデ型、④テ形型、⑤命題直示型、⑥シ型の 6 つを取り上げ、相手との関係性の違いによる使用頻度の違いについて述べている。これについては後で本研究の調査結果と比較する際に詳しく述べる。被験者は全員 20～30 代で、日本人母語話者 98 名と、中上級レベルの日本語学習者 111 名 (韓国人 62 名、中国人 49 名) である。

カノックワン (1997) では藤森 (1995) の分類も使いつつ、「断り」の中心構造が「できない、だめ、難しい」などの「不可」を表明する部分と、断る「理由」を表明する部分から成ること、そこへさらに付加成分がつき、相手への配慮や話し手の心的態度を表す表現、終助詞 (ちょっと、やっぱり、かな、など)、否定的マーカー (うーん、いやー、など) が出現することを指摘し、その意味について述べている。これは電話の録音による自然談話データのみを分析対象としている点で信頼性の高いデータだと言えるが、日本語母語話者同士の会話は扱っておらず、実際の日本人による日本語の断りについての分析ではない。この被験者は日本語母語話者 15 人と、タイ人、インドネシア人、ミャンマー人、フィリピン人、バーレーン人の中上級レベルの日本語学習者 11 名で、日本語母語話者と学習者の会話を調査対象としている。

ルンティエラ (2004) では、相手との関係性の違いによる断り方の違いを、談話完成型テストによって調べている。断る相手を社会的地位で自分より上・同等・下の 3 つに分け、それぞれを親しい相手 (親)・親しくない相手 (疎)・家族という 3 つにさらに分類し (3×3=9 通り)、そこから家族の同等を除いた 8 通りを設定し、タイ人のタイ語、タイ人の日本語、日本人のタイ語、日本人の日本語によるそれぞれの断りを分析した。断りの談話全体を意味公式の発現順序などによってパターン化し、日本人とタイ人の違いについて述べている。被験者は日本人もタイ人も全て大学 3～4 年生である。

3. 調査の概要

以上の先行研究をふまえて、本研究は、データ採集方法として、対面によるロールプレイと、携帯電話のメール（以下メール）による調査の二つの調査を行った。これらの二つの調査は、まず一人に予備調査を行い、いくつかの問題点を修正してから本調査に臨んだ。また、これらの調査を行った時期は、2005年の7月から10月である。

3.1 被験者

学習院大学の学生、19～23歳（2005年12月時点）の男女計7人。

- | | |
|-------------------|-------------------|
| A：20歳女性（2年生）兄が一人。 | X：19歳男性（2年生）姉が一人。 |
| B：22歳女性（4年生）妹が一人。 | Y：22歳男性（4年生）妹が一人。 |
| C：23歳女性（4年生）一人っ子。 | Z：23歳男性（4年生）弟が一人。 |
| D：23歳女性（4年生）弟が一人。 | |

ロールプレイによる対面調査ではA・B・C・X・Y・Zの6人に、携帯電話によるメール調査ではA・B・C・D・X・Yの6人から協力を得た。被験者は、調査者である筆者と、より自然談話に近いロールプレイを行う為に、筆者と普段通りの言葉で話せる年齢層であること、また、近い条件の被験者を集めやすいことなどから、大学生を選んだ。

3.2 調査の際に設定した相手

横山（1993）では、話者同士の関係は同性の知人および同僚という簡単な設定1通りのみで、藤森（1995）でも親・疎・上・下の4通りであった。本研究ではルンティーラ（2004）の8通りよりもさらに現実味を持たせる為、話者同士の関係を細かく具体的に設定した。

1) 社会的、あるいは年齢的に目上か同等か目下か（以下、[上]、[同]、[下]で表記）、2) 親しいか親しくないか（以下[親]、[疎]で表記）、3) 今後も付き合いがあるかないか（以下[○]、[×]で表記）、4) 男性か女性か（以下[男]、[女]で表記）、の4項目の組み合わせで、 $3 \times 2 \times 2 \times 2 = 24$ 通りの相手を、各自で具体的に実在人物を設定してもらう。その際、それぞれの状況の特質上、家族や親戚以外で、なるべく今現在同じ団体に所属している人を設定してもらった。表記上、例えば、[上・親]は目上でなおかつ親しい人、[疎・×・女]は親しくなく今後の付き合いもない女性を表す。

具体的な設定相手としては、大学の学科やサークル、バイト先の人を設定した人が多かったが、中には教授やピアノの先生、内定先の人事の人、小中学校の元同級生などを設定した人もいて、その場合はそれに合うように状況を調整した。

3.3 対面調査の方法

第一の調査としては、より自然談話に近く、且つ統制された条件下で比較可能であるロールプレイを採用した。まず、筆者が設定したある提案に対して、それを被験者が断るというロールプレイを筆者と共に行ってもらう。その後、録音されたロールプレイの会話を聞き直しながら、フォローアップインタビューを行った。ロールプレイの談話データは文字起こしをして、構造や言語的特徴も分析し、それらをフォローアップインタビューの結果とも照らし合わせて考察した。

フォローアップインタビューでは、まずアンケートとして、設定した相手ごとのロールプレイの中で①全て本音で話したか嘘をついたか、また嘘をついた場合はどの部分か、②断りやすかったかどうか、を記入してもらい、その後、それぞれなぜそうなったかの簡単な理由を聞いた。

また、設定相手との関係性の要素（上下・親疎・今後の付き合いの有無・性別）の中で、③断る際に最も気にした要素と④最も気にしなかった要素を1つずつ選んでもらった。そして、それぞれ他の要素を抜きにして、どちら（どれ）が最も断りやすいかも選んでもらった。例えば [上] [同] [下] ではどれが一番断りやすくどれが一番断りにくいか、[親] と [疎]、[○] と [×]、[男] と [女] では、それぞれどちらが断りやすかったか、を記入してもらった。その中で、取れた談話データだけではわからない被験者の発話意図なども随時確認しながら行い、最後に自由発話形式で感想を述べてもらい、それも録音して記録した。

これらのフォローアップインタビューによって、ただ相手との関係性による違いだけでなく、その断りの談話自体が断りやすかったかどうか、嘘をついたかなどの無意識の部分と、実際に現れる表現形式の関係性についても観察が可能になった。

3.4 メール調査の方法

第二の調査としては、筆者が設定したある提案に対して、携帯電話のメールで断りの文面を作って実際に送信してもらった。そしてその際、ロールプレイの時と同様の内容に、返信までの時間の項目を加えたアンケートフォームをパソコンのEメールで被験者に送り、そこに記入して答えてもらった。また感想なども書いてもらい、それも調査者（稲垣）に送り返してもらった。

3.5 設定した状況

ロールプレイやメールの場面設定や具体的な提案の内容については、ルンティーラ（2004）で使われた8つの状況の中から、大学生である被験者になるべく自然に遭遇し得る状況として、「大学でバーベキューをしたらという提案」（ロールプレイ）と「花束を贈ったらという提案」（メール）を採用した。

(1) 対面でのロールプレイ

被験者は、その団体で行われる、次回の飲み会の幹事であるという設定である。そこで各自が設定した相手に、店での飲み会ではなくバーベキューにしたらどうかと提案されるが、それを断ってもらう。被験者の設定した相手役は全て筆者が行った。調査者（稲垣）の発言は、内容は統一したが、被験者の設定した相手が「下」の場合はです・ます体で話す、「男」の場合は男言葉を使用するなどの変化をつけた。

調査者「今度の飲み会ってどこでやるの？」

被験者「いつもと同じ店／去年と同じとだよ。」

調査者「それより大学の中／公園 でバーベキューをやったら、その方が値段も安いし、みんなで協力してやれて楽しそうじゃない？」（「同」の場合の一例）

被験者「あー、でももう予約しちゃったあ。」（「同」の場合の一例）

(2) メールによる返信

被験者の所属する団体をやめる人（女性）の為に送別会をすることになって、各自が設定した相手からその連絡のメールが来た、という設定。そのメールの中で、送別会の際に渡すプレゼントとして花束はどうかと提案されるが、その提案を断る内容の返信メールを作ってもらう。最初に調査者（稲垣）側から提示した、提案のメール文は「上」からの場合、「同」からの場合、「下」からの場合、と3通り作成した。

調査者「今度、バイトの〇〇さんがやめるそうなので送別会をします。それで、その時に花束をあげるのはどうでしょうか。あまりもらう機会もないし嬉しいのではないのでしょうか？」（「下」からの場合）

被験者「うーん。花束だと後まで残らないじゃん？せっかくだし何か残るものの方がよくない？」（「下」の場合の一例）

4. 断りやすさの観点から

4.1 ロールプレイによる断り

次の表①はロールプレイ後のアンケート中の、嘘をついたか（L）、全て本音で答えたか（T）、また断りやすかったか（E）断りにくかったか（D）の2点についての各個人の回答を表にし、それぞれ平均値を求めたものである。

表中のT/Lの欄の数字は、全て本音で話した場合は0、嘘をついた場合、客観的に後から検証して明らかに嘘だとばれるもの（もう予約をしてしまった、他の人はみんな店がいいと言っている、など）は3、被験者の内面的な問題で、後から検証することができないもの（用意や片付けの際に後輩に気を遣わせたくない、何か問題が起こりそう、など）は2とした。この0、2、3、という数字の配分は、全て本音で話した時（=0）

表① ロールプレイ個人の傾向一嘘と断りにくさの2点からー

被験者	A (女)		B (女)		C (女)		X (男)		Y (男)		Z (男)		平均値			
	T/L	E/D	T/L	E/D	T/L	E/D	T/L	E/D	T/L	E/D	T/L	E/D	T	L	E	D
(1) (上・親・○・男)	0	3	3	2	0	3	0	1	0	2	0	1	0.5	2		
(2) (上・親・○・女)	2	4	0	2	0	3	0	3	2	4	—	—	0.8	3.2		
(3) (上・親・×・男)	0	3	0	3	3	3	3	4	0	3	3	2	1.5	3		
(4) (上・親・×・女)	2	3	3	3	3	3	0	3	0	2	2	3	1.7	2.8		
(5) (上・疎・○・男)	0	3	2	4	3	4	3	3	2	4	3	3	1.8	3.5		
(6) (上・疎・○・女)	0	2	2	4	0	4	0	3	—	—	2	4	0.8	3.4		
(7) (上・疎・×・男)	0	2	3	4	3	1	0	2	2	2	2	4	1.7	2.5		
(8) (上・疎・×・女)	2	3	2	4	3	2	3	3	0	2	3	3	2.2	2.8		
(9) (同・親・○・男)	0	1	0	3	0	1	0	1	0	1	0	1	0	1.3		
(10) (同・親・○・女)	0	1	0	1	0	2	0	1	2	1	0	1	0.3	1.2		
(11) (同・親・×・男)	0	1	0	1	0	2	0	3	0	4	0	1	0	2		
(12) (同・親・×・女)	0	1	0	1	0	3	0	3	2	4	2	1	0.7	2.2		
(13) (同・疎・○・男)	0	2	0	2	0	1	2	3	0	3	2	3	0.7	2.3		
(14) (同・疎・○・女)	2	3	0	2	0	4	0	2	—	—	2	3	0.8	2.8		
(15) (同・疎・×・男)	2	3	0	1	3	1	2	3	0	4	2	3	1.5	2.5		
(16) (同・疎・×・女)	2	3	2	4	0	4	3	1	0	4	2	3	1.2	3.2		
(17) (下・親・○・男)	—	—	0	3	3	4	0	2	0	1	0	1	0.6	2.2		
(18) (下・親・○・女)	0	2	0	1	0	3	0	3	0	1	2	1	0.3	1.8		
(19) (下・親・×・男)	—	—	0	3	0	3	0	3	0	2	0	1	0	2.4		
(20) (下・親・×・女)	0	2	0	1	0	3	2	3	0	2	2	1	0.7	2		
(21) (下・疎・○・男)	3	3	0	3	2	2	2	3	2	2	2	2	1.8	2.5		
(22) (下・疎・○・女)	2	3	2	4	2	3	2	3	—	—	2	2	2	3		
(23) (下・疎・×・男)	2	3	0	2	3	3	2	2	0	3	2	2	1.5	2.5		
(24) (下・疎・×・女)	2	3	2	2	2	3	2	4	2	3	2	2	2	2.8		
平均値	1	2.5	0.9	2.5	1.3	2.8	1.1	2.6	0.7	2.6	1.6	2.1	1.1	2.5		

注：T/L 0…全て本音で話した

(T=True L=Lie) 2…若干の嘘をついた (検証不可能)

3…明らかな嘘をついた (検証可能)

E/D 1…非常に断りやすかった

(E=Easy D=Difficult) 2…やや断りやすかった

3…やや断りにくかった

4…非常に断りにくかった

と、若干の嘘が含まれた時 (=2) の差の方が、若干の嘘が含まれた時 (=2) と明らかな嘘があった時 (=3) の差よりも大きくなるようにする為に、アンケートの回答を元に筆者が設定した。また、E/Dの欄の数字1~4は、被験者自身に記入してもらった。

(1) 断りやすさ (E/D 欄)

全体的に最も断りやすいのは [同・親・○] や [下・親・○・女] に対してで、最も断りにくいのは [上・疎・○] や [上・親・○・女] [同・疎・×・女] であった。ま

た全体的に、親疎か上下を最も気にすると答え、アンケートの際の数値としてもそこに大きな差が出ている人が多かった。複数の先行研究で「同」が最も断りやすく「上」が最も断りにくいという調査結果が出ているが、今回の調査では、人によっては「下」が最も断りやすかった人（Y、Z）断りにくかった人（C、X）もいて、「同」が最も断りにくかったという人（Y）もいた。

また、大学の中で下級生（A、X）だと「下」に対してより断りにくいと感じ、上級生（B、C、Y、Z）だと、「上」に対してより断りにくいと感じる傾向があるようだった。さらに、兄や姉など上の兄弟がいる人（A、X）は「上」に対して断りやすいと感じ、弟や妹がいる人（B、Y、Z）は「下」に対して断りやすいと感じる傾向があることも合わせて考えると、日頃接し慣れている人に対しては断りやすい傾向があるのかもしれない。また、「○」の方が今後の関係性に影響を与えたくない気持ちが働いて、「×」よりも断りにくいのではないかと予想をしていたが、「×」の方が断りにくいと感じる人の方が多かった。

(2) 嘘をつくか（T/L 欄）

全体的に最も本音で話しやすい相手は「同・親・男」や「下・親・×・男」に対してであり、最も嘘をつきやすいのは「上・疎・×・女」や「下・疎・女」であった。特に「下・疎・女」に対しては、今回の被験者全員が後から検証不可能な若干の嘘をついていた。全体的に「親」より「疎」に対して、「○」より「×」に対して、「男」より「女」に対して嘘をつきやすい傾向があった。

(3) その他

断りやすいかどうかや、本音で話せるかどうかが決まるその他の要因として、相手の性格的特徴（傷つきやすそう、我が強い、など）を重要視するという人や、今後ではなく、今までの付き合いの長さに関係するという人も複数いた。さらに、「普段あまり提案とかをしない人なのに、たまに提案した時に限って断るのも悪い」、「この人はわりと自己中心的な人だから自分も強引に自己中心的になれる」など、人によって様々なことを考えながら断っていることがアンケートによって明らかになった。

4.2 メールによる断り

次の表②はメールの返信をしてもらった際のアンケート結果である。嘘をついたか（L）、全て本音で答えた（書いた）か（T）、また断りやすかったか（E）断りにくかったか（D）の2点についての各個人の回答を表にし、それぞれ平均値を求めた。各欄の数字の設定方法や意味は表①と同様である。

またそれに加えて、アンケート中ではそのメールを返信するまでの時間はどれぐらい

表② メール個人の傾向一嘘と断りにくさの2点から一

被験者	A (女)			B (女)			C (女)			D (女)			X (男)			Y (男)			平均値		
	T/L	E/D	返	T/L	E/D	返	T/L	E/D	返	T/L	E/D	返	T/L	E/D	返	T/L	E/D	返	T	L	E/D
(1) (上・親・○・男)	0	2	A	0	4	A	0	2	B	0	2	A	0	4	B	0	1	B	0	2.5	
(2) (上・親・○・女)	0	1	A	0	3	A	0	3	D	0	3	B	0	4	B	0	1	B	0	2.5	
(3) (上・親・×・男)	0	2	A	0	1	B	0	3	C	0	2	A	2	4	C	0	1	D	0.3	2.5	
(4) (上・親・×・女)	0	1	A	0	3	A	0	3	B	0	2	C	2	4	C	0	1	C	0.3	2.3	
(5) (上・疎・○・男)	0	3	B	0	3	A	0	2	B	0	4	C	2	4	A	2	4	D	0.7	3.3	
(6) (上・疎・○・女)	0	3	B	0	2	A	0	3	B	0	4	C	2	3	B	2	3	D	0.7	3.0	
(7) (上・疎・×・男)	0	4	B	0	4	A	0	2	C	0	3	C	0	4	D	0	2	D	0	3.2	
(8) (上・疎・×・女)	0	4	B	0	4	A	0	2	C	0	2	B	2	3	C	0	2	D	0.7	2.8	
(9) (同・親・○・男)	0	1	B	0	1	B	0	2	B	0	1	A	0	1	B	0	1	B	0	1.2	
(10) (同・親・○・女)	0	1	B	0	1	B	0	2	C	0	1	B	0	2	A	0	1	A	0	1.3	
(11) (同・親・×・男)	0	1	B	0	2	B	0	2	C	0	1	B	0	1	C	0	2	D	0	1.5	
(12) (同・親・×・女)	0	1	B	0	1	B	0	3	C	2	2	C	0	4	C	0	2	D	0.3	2.2	
(13) (同・疎・○・男)	0	2	C	0	2	B	0	3	B	0	2	B	0	2	D	0	3	C	0	2.3	
(14) (同・疎・○・女)	0	3	D	0	1	B	—	—	—	2	3	B	0	3	C	0	2	C	0.4	2.4	
(15) (同・疎・×・男)	0	3	D	0	3	A	0	2	D	0	1	D	2	3	D	0	2	C	0.3	2.3	
(16) (同・疎・×・女)	0	3	C	0	3	B	0	3	B	2	3	D	0	1	E	0	2	C	0.3	2.5	
(17) (下・親・○・男)	—	—	—	0	2	B	0	3	B	0	1	B	0	2	B	0	1	B	0	1.8	
(18) (下・親・○・女)	0	1	C	0	1	B	0	3	B	0	2	B	0	1	B	0	1	B	0	1.5	
(19) (下・親・×・男)	—	—	—	0	2	B	0	3	B	0	1	B	0	2	C	0	1	B	0	1.8	
(20) (下・親・×・女)	0	1	C	0	2	B	0	2	C	2	2	C	2	3	D	0	1	C	0.7	1.8	
(21) (下・疎・○・男)	0	2	D	—	—	—	0	3	B	2	3	C	0	1	D	0	2	C	0.4	2.2	
(22) (下・疎・○・女)	0	2	D	0	1	B	0	3	C	2	3	D	2	3	C	0	2	B	0.7	2.3	
(23) (下・疎・×・男)	0	3	D	—	—	—	0	2	C	0	1	D	2	2	E	0	3	D	0.4	2.2	
(24) (下・疎・×・女)	0	3	D	0	3	B	0	3	B	2	3	D	2	4	C	0	2	C	0.7	3.0	
平均値	0	2.1		0	2.2		0	2.6		0.7	2.2		0.8	2.7		0.2	1.8		0.3	2.3	

注：T/L 0…全て本音で書いた

(T=True L=Lie) 2…若干の嘘をついた(検証不可能)

3…明らかな嘘をついた(検証可能)

E/D 1…非常に断りやすかった

(E=Easy D=Difficult) 2…やや断りやすかった

3…やや断りにくかった

4…非常に断りにくかった

返 A…今やっている作業を一時中断して即返信する

B…今やっている作業にきをつけてから返信する

C…今やっている作業が全て終わってから返信する

D…時間ができた時、その日のうちに返信する

E…翌日以降に返信する

(全て相手からのメールは昼頃に来たという設定)

参考表 表① (対面)、表② (メール)、それぞれの E/D 欄の平均値

	[上]	[同]	[下]
対面	2.89	2.17	2.40
メール	2.73	1.96	2.09

	[親]	[疎]
対面	2.00	2.81
メール	1.88	2.65

	[○]	[×]
対面	2.40	2.56
メール	2.20	2.33

	[男]	[女]
対面	2.40	2.60
メール	2.16	2.38

か、A（今やっている作業を中断して即返信する）、B（今やっている作業にきりをつけてから返信する）、C（今やっている作業が全て終わってから返信する）、D（時間ができた時、その日のうちに返信する）、E（翌日以降に返信する）の5つから選んで答えてもらった。その結果が「返」の欄に載せてある。

(1) 断りやすさ（E/D 欄）

断りやすい相手や断りにくい相手の傾向は対面の時とほぼ同じである。最も断りやすい相手は〔同・親・○〕や〔同・親・×・男〕、〔下・親・○・女〕で、最も断りにくい相手は〔上・疎・男〕や〔上・疎・○・女〕、〔下・疎・×・女〕となっており、ロールプレイの時よりも親疎が断りやすさの重要な決め手になっているようである。

そして目の前に相手がいなく、相手の表情を見たり相手の言葉に遮られたりすることなく、自分の考えをまとめて伝えられる、などの理由から、全体的にやや断りやすくなったと考えられる。傾向としては、〔同〕や〔下〕、〔親〕の相手であり、ロールプレイで断りやすいと感じる相手は、メールだとより断りやすくなるようである。

しかし、中にはあまり変わらないもの（(5)、(8)、(12)、(13)）や、一部対面より断りにくなるもの（(1)、(7)、(24)）もあった。これは、メールではきちんとした簡潔な文章で、誤解や失礼のないように自分の考えを伝えなくてはいけない点や、メールをし慣れていない相手だとどう調子で送ればよいかわからない点など、対面にはない精神的負担があることが原因だと考えられる。

(2) 嘘をつくか（T/L 欄）

全体的に相手の提案を読んでから、自分の考えや言葉をまとめる時間がある分、とっさに嘘をつかないでもいいので嘘がかなり減った。全く嘘をつかなかった人（A、B、C）もいたし、後から検証可能な、明らかな嘘をついた人もいなかった。ただ目の前に相手がいなくということで、対面より嘘をつきやすくなると感じた人（X）もいた。

(3) その他

返信までの時間としては全体的には〔上〕、〔親〕、〔○〕には早めに返信する傾向があった。ただこれは、「断り」という内容や相手との親疎や上下などの関係よりも、相手が携帯のメールを日々どういうスタンスで利用しているかに合わせる、という人が複数いた。つまり、携帯のメールはなるべく早く返すものと思っているか、時間がある時に返信するものと思っているか、常に携帯を持ち歩いて頻繁にチェックする人か、携帯はたまにしかチェックしない人か、などこれまでの相手とのメールのやりとりの中でできた暗黙のルールに従うようである。この場合の断りやすさは返信しやすさに近く、従って日頃メールをし慣れている相手には返信しやすく、慣れない相手には返信しにくいよ

うだ。ただ、断りにくい相手は、「色々考えて文章を作るから返信が遅くなる」という人もいれば、「断りにくいからこそさっさとすませようと早めに返信する」という人もいた。

4.3 結果の分析

断り方を決める際に、上下や親疎は重要な要素ではあるが、断りやすさや嘘をつくかはそのような相手との単純な関係性だけでは決まらない。

被験者にとって気を遣う相手、つまり断ることで人間関係に悪い影響が出る可能性があるが、その関係性を損ないたくない相手ほど断りにくくなると言える。前者の、人間関係に悪影響を与える可能性が高まる具体的な要因としては、これまでの相手との付き合いが短かったり、薄かったり、浅かったりする場合や、相手が傷つきやすい、根に持ちやすい、悲観的、などの性格的特徴を持っている場合があり得る。

また後者の、関係性を損ないたくないと考える具体的な状況としては、第一に、異性が同性かを問わず、相手のことが好きで、今後も付き合い続けていきたい場合、第二に、同一集団に属しているなど、本人の意思や気持ちに関係なく今後も付き合いがあることが明らかな場合、そして第三には、同一集団の中で上下の力関係があるなど、相手との関係の悪化が、自分の社会的地位や生活環境の悪化に直結する場合、この3つが考えられる。そしてこれらの要素を総合的に考えながら断り方を決めていると言える。

実際の数値として今後の付き合いがある人（表中の〔○〕）の方が今後の付き合いがない人（表中の〔×〕）よりも断りにくい、という結果が出なかったのも、今後の付き合いが実際にあるかどうかよりも、今後もよい関係でいたいかどうかの方が重要だということを裏付けていると言える。そして、全体の平均にすると〔上〕や〔疎〕はやはり断りにくい、という数値が出ているが、個別に見ていくと、単純に〔上〕や〔疎〕だからという理由だけで断りにくくなるわけではないことも説明がつく。〔上〕の相手であれば、上下の力関係があり、関係の悪化が自分の不利益につながる可能性は高いが、その相手との付き合いが長かったり、その相手が一度断ったことを気にするような性格的特徴を持っていなかったりすれば、断りにくくはならない。〔疎〕の相手も、付き合いは短かったり浅かったりする可能性は高いが、その相手との関係悪化が被験者にとって何の不利益ももたらさないならば断りにくくはならないのである。

5. 理由の述べ方の観点から

「理由」は断りの中で非常に重要な要素であり、ルンティーラ（2004）でも、断りの中に絶対に現れると断言されている。つまり、どのような理由をどのように述べるかこそが断り方そのものと言っても過言ではない。

そこで、ロールプレイ場面、メール場面、それぞれの理由を述べる際に使われた言語

表③ーイ 対面（ロールプレイ）場面の理由の述べ方 ー上下での比較からー

番号	上下	親疎	○×	性別	から	ので	し	ない	じゃない	じゃん	のだ+けど	のだ+よね	のだ他
(1)	上	親	○	男	2	4	1	2	0	0	1	0	1
(2)	上	親	○	女	2	5	3	1	1	0	2	0	1
(3)	上	親	×	男	0	3	3	1	3	0	1	2	1
(4)	上	親	×	女	1	5	1	2	2	0	1	2	0
(5)	上	疎	○	男	1	1	4	1	3	0	1	1	1
(6)	上	疎	○	女	6	2	4	0	6	0	2	0	0
(7)	上	疎	×	男	3	4	3	1	4	0	1	2	3
(8)	上	疎	×	女	2	3	1	3	0	0	1	2	2
小計					17	27	20	11	19	0	10	9	9
(9)	同	親	○	男	3	0	3	1	1	4	0	1	1
(10)	同	親	○	女	6	0	5	0	2	3	2	0	0
(11)	同	親	×	男	4	0	5	4	0	7	0	0	1
(12)	同	親	×	女	5	0	6	2	0	2	1	3	1
(13)	同	疎	○	男	4	0	1	2	0	5	0	3	0
(14)	同	疎	○	女	5	0	2	1	1	1	0	2	0
(15)	同	疎	×	男	6	1	3	0	0	1	2	2	2
(16)	同	疎	×	女	3	0	4	1	4	2	1	0	0
小計					36	1	29	11	8	25	6	11	5
(17)	下	親	○	男	3	0	0	0	0	2	0	0	1
(18)	下	親	○	女	8	0	9	0	1	0	0	1	0
(19)	下	親	×	男	5	0	1	3	1	1	0	1	0
(20)	下	親	×	女	5	0	1	0	1	2	2	2	1
(21)	下	疎	○	男	3	1	4	0	0	2	1	0	1
(22)	下	疎	○	女	8	1	3	1	1	1	0	0	1
(23)	下	疎	×	男	5	0	2	0	2	2	0	1	0
(24)	下	疎	×	女	5	0	2	0	1	1	0	1	0
小計					42	2	22	4	7	11	3	6	4
計					95	30	71	26	34	36	19	26	18

注：「のだ他」は「のだ+よ」（10例）、「のだ」（4例）、「のだ+もん」（2例）、「のだ+ね」（1例）、「のだ+わ」（1例）を示す。

表③ーロ 対面場面の理由の述べ方 ー男女ー

	から	ので	し	ない	じゃない	じゃん	のだ+けど	のだ+よね	のだ他
[男]	39	14	30	15	14	24	7	13	12
[女]	56	16	41	11	20	12	12	13	6
計	95	30	71	26	34	36	19	26	18

表③一ハ 対面場面の理由の述べ方 ー親疎ー

	から	ので	し	ない	じゃない	じゃん	のだ+けど	のだ+よね	のだ他
[親]	44	17	38	16	12	21	10	12	8
[疎]	51	13	33	10	22	15	9	14	10
計	95	30	71	26	34	36	19	26	18

表③一ニ 対面場面の理由の述べ方 ー今後の付き合いー

	から	ので	し	ない	じゃない	じゃん	のだ+けど	のだ+よね	のだ他
[○]	51	14	39	9	16	18	9	8	7
[×]	44	16	32	17	18	18	10	18	11
計	95	30	71	26	34	36	19	26	18

形式とその使われ方を考察していく。

5.1 ロールプレイでの理由の述べ方

前頁の表は、被験者が (1) ～ (24) の相手に、それぞれどのような言語形式を用いて断る際の理由を述べたかを示したものである。一つのロールプレイの中で同じものが複数使われた場合も、全て延べ語数で数えている。

主な理由を述べる形式「から」「ので」「し」の中で使用頻度が最も高いものは「から」(95例)、次に「し」(71例)であり、最も低いものは「ので」(30例)である。そしてこれらの使い分けは主に、上下と男女が基準になっていて、親疎や今後の付き合いの有無による目立った差は表れなかった。

「から」は [同] か [下]、[女] の相手に出やすい。また、「し」と同時に出現することも多い。

(1) A 女 (10) [同等・親しい・今後の付き合い○・女] (True・1 (非常に断りやすい))

A	あ、そう、バーベキュー、めっちゃ楽しい、と思うんだけど、 <input type="text"/> (設定相手の下の名前呼び捨て) も好きだと思う <u>し</u> 。
相手	うん。
A	でもー、今回、の飲み会は、なんかすごい久々にみんな会う <u>しー</u> (うん)、なんかゆっくり、みんなでしゃべりたい <u>から</u> (うんうん)、なんかバーベキューだと色々やることある <u>から</u> 、なんか、あれやんなきゃ、これやんなきゃ、とかってなっちゃうと思う <u>からー</u> (あー)、やっぱ、お店で、ゆっくり飲もうと思うんだけど。

「し」は [同] に出やすく [上] と [下] にはほぼ同程度に出た。そして「から」と同時に出現しやすい。

(2) B 女 (18) [下・親・○・女] (T・1)

B	んー、だよな、でもさあー、…うん、準備するの大変だし、またなんか <input type="text"/> (B と設定相手の共通の知人の苗字) さんに車出してもらうのも悪いしー。
相手	そうですかねえ？。
B	うん、店飲みだったら、絶対川崎だから、そこにみんな、集まりやすいと思うし。

「ので」は [上] に対して出やすく、[同] や [下] にはほとんど出ない。

(3) A 女 (2) [上・親・○・女] (L・4)

A	あー、っとー、バーベキューも、すごい楽しいし、協力できると思うんですけどー、(沈黙 2 秒) それだとー、なんか、事前準備が、いるので、なんかピアノの先生とか、色んな先生方がいらっしゃるの <u>で</u> 、なんか、早めに、集まってもらうのは、…申し訳ない <u>ので</u> 、すぐに来て、ごはんが食べられるように、お店にしたいんですけど。
---	--

ただ、これらには例外もある。そして、相手からの提案を断るという状況では「から」「ので」「し」のような表現がどの会話でも出やすいが、1 つも使われていないケースも少なくなかった。これは、[疎・×] のようなおそらく本人にとって「どうでもいい」相手か、逆に付き合いが長いかなり親しい相手かで、非常に簡潔に一方的に話を終わらせている場合が多かった。

(4) C 女 (15) [同・疎・×・男] (L・1)

C	あー、でももう予約しちゃったぁ。
相手	あ、え、お店？。
C	うん。

(5) Z 男 (9) [同・親・○・男] (T・1)

Z	やーめんどくせ、やんねーやんねー、…ってかやるヤツいないよ周りに、飲み会でいいもう、めんどくさい。
相手	なんでー？
Z	じゃどこでやんだよ？、やるとこねーよ。

また、一般的に理由を述べる際に用いられる形式とされている「から」「ので」「し」以外に、「のだ+けど」「のだ+よね」「ない？」(「じゃない」や「じゃん」も含む) などの形式もかなりの頻度で使われていた。これらは理由を述べる為というよりは、理由を述べた上で相手の共感や同意を求める為に用いられている。

(6) C 女 (2) [上・親・○・女] (T・3)

C	あー、んー、それもー、ちょっといいんだけどー、なんか、鉄板とかな <u>くない</u> ？。
C	なんか、そういうの考えると、ちょっとめんどいかなーとか思う <u>んだけど</u> 。

(7) Y 男 (8) [上・疎・×・男] (T・2)

Y	あー、そうー、ですね、ただ、でもめんどくさい <u>ん、</u> <u>ですよ</u> ねー、やっぱ大学の中でやんのって、…そ、本当、鉄板、いちいち持って来なきゃいけないかったりー、野菜を、買ったりー、切ったりー、…んー、っていうのがあ <u>って</u> 、やっぱ店にしたい <u>ん</u> ですよー。
---	---

(8) Z 男 (13) [同・疎・○・男] (L・3)

Z	いい、ねえ、…そっかあ、でも、時間、夜だぜ？…なんか、暗く <u>ね</u> ？。
相手	いいじゃん、いいじゃん。
Z	おー、え、…やー、準備とか、めんどくさい <u>じゃん</u> ？。
相手	あー、みんなでやればよくね？。
Z	そうだよー、…別に断る理由ないんだけどさあー、…そっかー、どうしよっかなー (沈黙2秒)、とりあえずもう、予約はしちゃった <u>んだよね</u> 、時間、とか、日程の。
相手	ああ、そうなの？。
Z	うーん、とりあえずもうコースとかも、一応、自分、考えて、決めたんだ、から、今回はじゃあ、今回はまあ、飲み会でいい <u>じゃん</u> 。

他には少数ながら「わけ」「テ形」命題直示で断言したものや命題＋終助詞などもあった。

(9) Y 男 (15) [同・疎・×・男] (T・4)

Y	あー、やーね、めんどくさい <u>わけ</u> よー、…正直。
相手	そうかね？。
Y	だってさー、鉄板持って来なきゃいけないしー、…野菜、とかさー、買って来なきゃいけない <u>わけ</u> じゃーん？。
Y	でまー、…店の方がうまいしさあー (沈黙2秒)、バーベキューよりは店の方がいいんだわ、…うんー。

(10) A 女 (3) [上・親・×・男] (T・3)

A	えっとー、あーー、バーベキュー、って、いう意見もあったんですけど、他にも。
相手	うん。
A	うーん、なん、絶対ー、お店の方が、 <u>楽しいですよー</u> 〈笑う〉。
相手	〈笑う〉そう？。
A	なんかー、 <input type="text"/> （所属サークル名の略称）とか人数多いしー（うん）、なんだろう、なんか、みんなが、ごたごたすごい <u>なりそうでー</u> 、お店行って、座ってー、なんかいつもみたいに、飲んだ方が、なんか、 <input type="text"/> （所属サークル名の略称）でー、バーベキューとかやったことないしー（うん）、いいんじゃないかなと思ったんですけど。

(11) Z 男 (17) [下・親・○・男] (T・1)

Z	いやあーー、いやー、 <u>無理っす</u> 〈笑う〉、…いやー、ないっす、 <u>めんどくさいっす</u> 、…はは〈笑う〉。
相手	たまには、やりましょうよー。
Z	わー、やー、 <u>###</u> ってー、 <u>めんどくさいっすよー</u> 、 <u>やりたくないよー</u> 、…じゃあ <input type="text"/> （設定相手のあだな）君幹事やってよー。
相手	やー、だって <input type="text"/> （Zの苗字）さんですもん。
Z	おお、だってもう決まっ、も、もう決めたし、も、もう、飲み会っ、今回は〈笑う〉。

5.2 メール場面での理由の述べ方

次の表は、表③と同様に、被験者が(1)～(24)の相手に、それぞれどのような言語形式を用いて断る際の理由を述べたかを示したものである。一つのメールの中で同じものが複数使われた場合も、全て延べ語数で数えている。

主な理由を述べる形式の中で使用頻度が最も高いのは「から」(35例)、次に「し」(27例)最も低いのは「ので」(21例)で、順位は対面の時と同じだが、対面の時より総数も少なく、その差も小さい。これは、対面と比べるとメールでは発した言葉が目に見え、後で書き直しもできる為、非文法的な「～から、…から」のように重複した表現が出にくいこと、また対面のような複数のやりとりはないこと、などの理由が考えられる。また、対面の時より、個人によって使う言葉、使わない言葉がはっきりと分かれ、その分状況や相手による使い分けが減り、結果として被験者間の個人差が大きくなった。

表④ーイ メール場面の理由の述べ方 ー上下の比較からー

番号	上下	親疎	○×	性別	から	ので	し	ない	じゃない	じゃん	のだ+けど	のだ+よね	のだ他
(1)	上	親	○	男	1	2	1	0		1	0	2	0
(2)	上	親	○	女	2	2	0	2		1	0	1	0
(3)	上	親	×	男	0	3	1	1		1	0	2	0
(4)	上	親	×	女	1	2	0	2		0	0	4	0
(5)	上	疎	○	男	2	2	2	2		1	0	4	0
(6)	上	疎	○	女	1	3	0	1		0	0	3	0
(7)	上	疎	×	男	1	2	0	1		1	0	3	0
(8)	上	疎	×	女	1	1	1	1		2	0	1	0
小計					9	17	5	10		7	0	20	0
(9)	同	親	○	男	2	0	3	4		1	2	0	1
(10)	同	親	○	女	2	0	1	4		1	1	1	0
(11)	同	親	×	男	2	0	0	2		2	1	0	0
(12)	同	親	×	女	3	0	2	2		1	0	1	0
(13)	同	疎	○	男	1	0	1	1		1	1	2	0
(14)	同	疎	○	女	2	0	1	2		1	0	1	2
(15)	同	疎	×	男	0	0	1	2		1	2	1	0
(16)	同	疎	×	女	2	1	1	2		1	0	1	0
小計					14	1	10	19		9	7	7	3
(17)	下	親	○	男	2	0	1	2		2	2	0	0
(18)	下	親	○	女	2	0	1	1		0	2	1	0
(19)	下	親	×	男	2	1	1	1		3	0	1	0
(20)	下	親	×	女	1	0	2	1		0	1	1	0
(21)	下	疎	○	男	0	1	1	2		0	0	0	1
(22)	下	疎	○	女	2	0	5	3		0	1	2	1
(23)	下	疎	×	男	1	1	0	1		1	0	1	0
(24)	下	疎	×	女	2	0	1	1		2	1	2	1
小計					12	3	12	12		8	7	8	3
計					35	21	27	41		24	14	35	6

注:「のだ他」は「のだ」(3例)、「のだ+よ」(1例)を示す。

表④ーロ メール場面の理由の述べ方 ー男女ー

	から	ので	し	ない	じゃない	じゃん	のだ+けど	のだ+よね	のだ他
[男]	14	12	12	19		15	8	16	2
[女]	21	9	15	22		9	6	19	4
計	35	21	27	41		24	14	35	6

表④ーハ メール場面の理由の述べ方 ー親疎ー

	から	ので	し	ない	じゃない	じゃん	のだ+けど	のだ+よね	のだ他
[親]	20	10	13	22		13	9	14	1
[疎]	15	11	14	19		11	5	21	5
計	35	21	27	41		24	14	35	6

表④一ニ メール場面の理由の述べ方 ー今後の付き合いー

	から	ので	し	ない	じゃない	じゃん	のだ+けど	のだ+よね	のだから
[○]	19	10	17	24	9	9	17	5	1
[×	16	11	10	17	15	5	18	1	3
計	35	21	27	41	24	14	35	6	4

「から」は基本的に対面と同じような相手（[同] か [下]、[女]）に出やすく、「し」と同時に出現しやすいのも変わらないが、やはり全体で見ると差が縮まっている。

(12) B 女 (20) [下・親・×・女] (T・2・B)

う～ん、いつもあげてるプレゼント花束だから今度は違うプレゼントあげるのもいいと思うよ☆花束だと直前に買わなきゃしおれたりしちゃうし (>_<)

「し」はメールでは [下] か [同]、[○] に出やすい。対面では [上] に対しても出やすかったがメールでは出にくい。

(13) D 女 (22) [下・疎・○・女] (T・3・D)

あ～、花束もらうと嬉しいよね☆ん～、でもさぁ、なんかせっかくだし、もっとあとに残るものの方が記念になるし、いいような気もしない？ どうかねぇ？

「ので」は [上] に対して出やすく、[同] や [下] にはほとんど出ないのは対面と同じだった。また比較的早く返信されるメールに出やすい。下記は同じ被験者 (B) が上下以外の要素が同じ相手に対して、内容としても同じような断り方をしたもののだが、やはり [上] には「ので」、[同] には「から」が使われている。

(14) B 女 (1) [上・親・○・男] (T・4・A)

そうですね。でもいつも花束なので、今度は違うプレゼントとかどうですか？

(15) B 女 (9) [同・親・○・男] (T・1・B)

う～ん。いつも花だからたまには違うプレゼントあげるのもいいんじゃないかなぁ (>_<)

また、これらの他には [上] に対して、「と思う／気がする+のだ+けど／が」の形式がかなりの頻度で見られ、これらの多くはその形式で文が終わる中途終了文になっていた。

(16) C 女 (3) [上・親・×・男] (T・3・C)

ただ、花束だといずれなくなってしまうので、何か残るものがよいのでわなにかと思うのですが。

(17) Y 男 (4) [上・親・×・女] (T・1・C)

花束ってもらって結構、嬉しいですよね。でもバイトの送別会っていう雰囲気じゃない気がするんですよ。もっと気軽なものの方がもらいやすい気がするんですけど。

(18) X 男 (6) [上・疎・○・女] (L・3・B)

花束の他にはあげないんですか？花束よりかもっと形に残るやつの方がいいと思うんですが (>_<)

(19) B 女 (7) [上・疎・×・男] (T・4・A)

でもプレゼントいつも花なので、今度は違うプレゼントとかあげるのもいいと思うんですけど f^_^;

また、[同] や [親] に対しては「ない？」の形式がかなりの頻度で見られた。これらは、このメールの後の相手からの返信を促す効果や、疑問形にすることで、相手に「提案を断られた」という印象を与えにくくする効果があると考えられる。

(20) C 女 (2) [上・親・○・女] (T・3・D)

ただ、花束だとなくなってしまうからさみしくないですか？何か残るものとかのほうが覚えてくれるかなって (^-^)

(21) D 女 (9) [同・親・○・男] (T・1・A)

ええー、花束～？なんかありきたりだし、せっかくだから何かもっと意外性のあるモノの方がよくない？その場で開けてみんなの笑いが取れるヤツの方が場も盛り上がるじゃん (^皿^)?

(22) X 男 (15) [同・疎・×・男] (L・3・D)

花束！？ん～微妙じゃない f^_^; なんか形に残るやつにしようよ！

(23) C 女 (17) [下・親・○・男] (T・3・B)

うーん。花束だと後まで残らないじゃん？せっかくだし何か残るもののほうがよくない？

5.3 結果の分析

(1) ロールプレイとメールの比較

まず大きな共通点として、理由を述べる形式として最もよく使われるものは「から」、次に「し」、「ので」となるが、それらよりも「ない？」「のだ」などの他の形式もこれら同程度に、あるいはこれら以上によく使われていることが挙げられる。

これは、相手からの提案を断る際に、まずは相手に別の提案を投げかけたり、自分の考えや気持ちへの共感を求めたりする表現が出ることや、相手のフェイスを気遣った結果によるものと考えられる。メールの文面は書いた文章ではあるが、今回の調査では被験者が全員学生であったこともあり、かなり話し言葉に近い文体のメールが多かった為、使われる言語形式の差が小さくなったと考えられる。

相違点としては、対面とメールでは同じ相手に対してでも、多く使われる形式に違いがあった。例えば「し」は対面だと上にも出やすいが、メールだと出にくい。

これは、「し」が話し言葉であるということもある。「し」は付け加える意味と理由を述べる意味と両方を持ち合わせている。だから、面と向かって話している時は、あまり相手に露骨に反論したくはないので、1つの理由の後に「し」をつけて濁せば、暗に「他にもまだ理由はあるが察して欲しい」という気持ちの表れと解釈できる。しかし、メールだと表情や語調がわからないので、「他にもまだ理由はあるが、面倒だから全ては言わない」という非常に投げやりなニュアンスに解釈される可能性があり、なるべく誤解を避けたいメールではあまり使われれないと言える。

「のだ＋よね」も、対面ではよく使われたがメールではあまり使われなかった形式だが、これも誤解を避ける為、という同様の理由からだと考えられる。逆に、「ない？」は対面と比べてメールでは圧倒的に増えている。これは対面以上に言葉によって相手のフェイスを気遣う必要があるからだと考えられる。

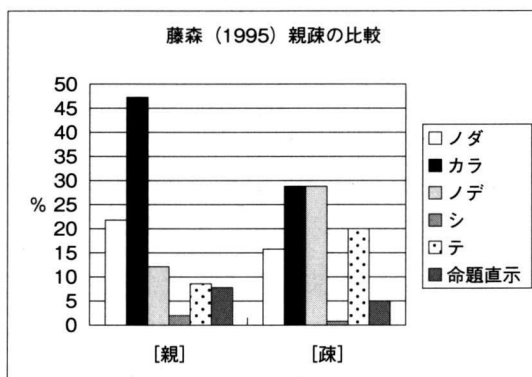
(2) 藤森 (1995) との比較

藤森 (1995) は「断り」発話を構成する意味公式のうち、最も使用頻度が高い「弁明」発話の節末及び文末形式の使用状況を、日本語学習者と母語話者について比較したものである。藤森 (1995) は、「このような状況で、このように誘われた場合、何と答えるか」という質問に対して、紙面に記述する談話完成型テストであり、本研究と調査方法は異なるが、相手による断り方の違い、という点でも理由表現に着目している点でも共通していたので、比較対象とした。本研究では、藤森 (1995) が扱ったカラ、ノデ、シ、ノダの4つを中心に、日本語母語話者のデータと比較した。この際、藤森 (1995) で扱われている「テ形」と「命題直示型」の二つの言語形式は、断りの理由を述べる為に用いられたのか、単に状況説明などの他の目的で用いられたのか、その基準が曖昧で判断が非常に難しかった為、今回は比較の対象外とした。

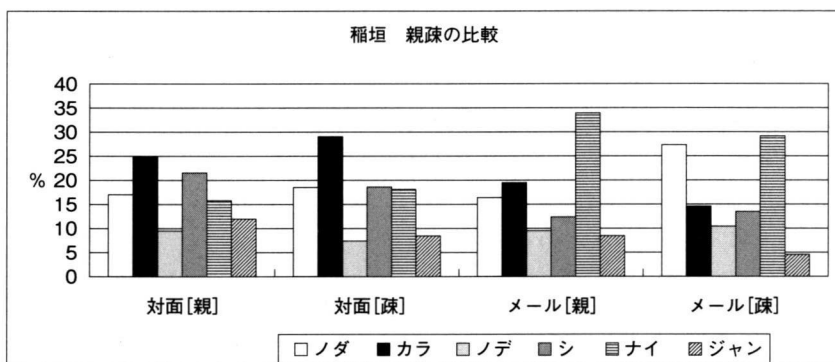
まず、藤森 (1995) では「親」の相手に対してよく用いられる弁明の形式として、カラ型が圧倒的に多く、そこからノダ型、ノデ型と続き、シ型は出現率が最も低い(グラフ①)。しかし本研究の調査では、対面、メール共に「ので」よりも「し」や「ない」の方が多くなっている(グラフ②)。

「疎」の場合でも、藤森 (1995) では、カラ型とノデ型の2つがほぼ同じで一番多く、

▼グラフ①



▼グラフ②



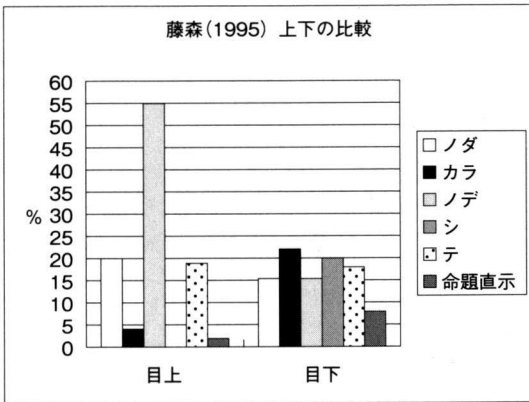
次にノダ型と続き、シ型はここでも最も少ない (グラフ①)。しかし本研究の調査では対面とメールで差が出ているものの、やはり「ので」より「し」や「ない？」の方が多くなっている (グラフ②)。

また、[上] に関して藤森 (1995) では、ノデ型が圧倒的に多く、ノダ型とテ形型が僅差で続くが、カラ型はほとんど出現せず、シ型については全く出現しないことが指摘されている (グラフ③)。しかし本研究の調査では「のだ」と「ない」の方がやはり「ので」よりは多く、「し」や「から」もそれほど少なくはない (グラフ④)。

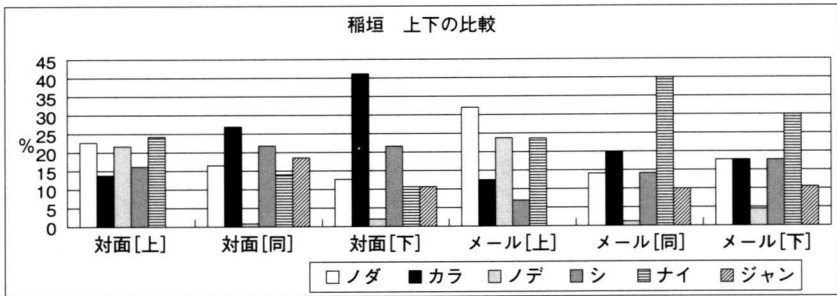
[下] でも、命題直示型以外はほぼ同程度表れ、最も多いカラ型に続きシ型、テ形型となり、ノダ型とノデ型が同数となっていてあまり大きな差は見られない (グラフ③)。本研究の調査では対面でもメールでもまず「ので」が圧倒的に他よりも少なくなっている。そして、多いものが対面では「から」「し」、メールでは「ない？」となり、やはり藤森 (1995) とは違う傾向を示していると言える。 (グラフ④)。

この藤森 (1995) の研究では日本語母語話者の被験者について詳細は書かれていない

▼グラフ③



▼グラフ④



が、20代～30代の学生、会社員、主婦である男女とあり、誘いを断るという状況で行われている。今回の調査との世代や職業、時代（10年前）などの相違点があること、談話完成型テストという性質上、完全に話し言葉である「し」が出にくかったこと、また「相互のやりとり」はなく、いくつかの理由を並列して並べる為の「し」が出にくかったことなどが「下」以外の相手に対してシが少なかった原因と考えられる。

また、「から」は「上」に対して使うには失礼になることがある、「から」を用いて相手の提案や誘いを否定するのは直接的すぎてよくない、などの記述もあるが、今回の調査ではどちらも出現している形式だった。

そして、先行研究では触れられていなかった、「ない?」「じゃない」「じゃん」などの形式もかなり頻出するので、このような「ない?型」も弁明の形式の一つに加えた方がよいと考えられる。藤森（1995）の「命題直示型」の中にこれらの形式が含まれているという可能性もあるが、仮にそうであったとしても、「めんどくさい」「用意が大変だ(よ)」などの純粋な「命題直示型」と「めんどくさくない?」「用意が大変じゃん」などは、話し手の意識の上でも、受け手の印象としてもかなり異なるものであり、別のも

のとして捉えるのが自然である。そして理由を述べる形式として「ので」は一般的と考えられているが、少なくとも大学生の間で実際の使用頻度は高くなく、普段の使用場面では、「し」「ない?」「のだ」などの形式の方が良く使われると言える。

6. おわりに

本研究の調査・分析の結果、以下の点が明らかになった。

- ・断りやすさや嘘をつくかどうかは、被験者がその相手に対し、気を遣うべき相手であると認識しているかどうかによって決まる。傾向としては、[疎] や [女] に対して断りにくいと感じる人が多い。
- ・対面でもメールでも断りやすさについてはほぼ同様の傾向が見られた。全体的な傾向としてはメールの方が断りやすくなっているが、必ずしもメールの方が対面より断りやすいとは言えない。メールでは、誤解を生まないような表現を選ぶ傾向がある。
- ・断りの際に理由を述べる時に、対面、メールに関わらず一般的な表現として最もよく使われるのは「から」、次に「し」である。そして一般的とされている「ので」は [上] などの限られた相手には多く使われるものの、「ので」より「のだ」「ない?」などの他の形式の方が広く多く使われている。
- ・先行研究に上げられていない「ない?」や「じゃん」などの表現形式は断りの際の理由を述べる形式として機能している。

本稿では、相手による断りやすさや断り方の違い、またその断りの中の理由の述べ方の違いやヴァリエーションについて見てきた。しかし、断る際にあげられた、具体的な理由の内容にも相手による違いがあり、これらはいくつかのパターンに分けられる。そしてその中には、森山 (1990) や目黒 (1994) で扱われた型にあてはまらないものも少なくなかった。この断りのパターンの分類や、前件に由来理由の性質と、「から」「ので」「し」などの表現形式との関連性については、稿を改めて論じたい。

参考文献

- (1) 生駒智子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティックトランスファー; 「断り」という発話行為について」『日本語教育』79号日本語教育学会
- (2) 井出祥子・荻野綱男・川崎昌子・生田少子 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動—大学生の場合—』南雲堂
- (3) カノックワン・ラオハブラナキット (1997) 「日本語学習者に見られる『断り』の表現: 日本語母語話者と比べて」『日本語教育論集 世界の日本語教育』第7号 国際交流基金 日本語国際センター
- (4) 蔡胤柱 (2005) 「日本語母語話者の E メールにおける『断り』—『待遇コミュニ

ニケーション』の観点から」『早稲田大学日本語教育研究』第7号 早稲田大学大学院日本語教育研究科

- (5) 藤森弘子 (1995) 「日本語学習者に見られる『弁明』意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習者の場合—」『日本語教育』87号 日本語教育学会
- (6) 目黒秋子 (1994) 「『謙遜型』断りのストラテジー」『東北大学文学部 日本語学科論集』第4号 東北大学文学部日本語学科
- (7) 森山卓郎 (1990) 「『断り』の方略—対人関係調整とコミュニケーション—」『月刊言語』第19巻第8号 大修館書店
- (8) 横山杉子 (1993) 「日本語における、『日本人の日本人に対する断り』と『日本人のアメリカ人に対する断り』の比較—社会言語学のレベルのフォリナートーク—」『日本語教育』81号 日本語教育学会
- (9) ルンティエラ・ワンウィモン (2004) 「タイ人日本語学習者の『提案に対する断り』表現における語用論的転移—タイ語と日本語の発話パターンの比較から」『日本語教育』121号 日本語教育学会

(いながき・けい 博士前期課程)